ラング世界童話集 8

あかい子の童話集

半ぺらひ

ラング
世界童話
全集

8

川端康成
野上

あか[illegible]ろの童[illegible]

半ぺらひよ[illegible]
ブルーイネックの[illegible]
霜の王こ[illegible]
ふしぎな ぼだいじ[illegible]
ほか

東京 創元社

	あかいろの童話集　〈ラング世界童話全集8〉
N.D.C. 933	アンドルー・ラング 川端康成　野上彰共訳 東京　東京創元社　昭和33 (1958) 246 p.　図版　21.5 cm 半ぺらひよこ　ほか12編

ラング世界童話全集8
あかいろの童話集
昭和三十三年十二月二十五日　初版発行

訳者　川端康成
　　野上彰
発行者　小林茂
発行所　株式会社　東京創元社
東京都新宿区新小川町一の十六
電話九段(33)八五一一―五
振替東京一五六五

定価二八〇円

落丁・乱丁がございましたら，おとりかえいたします。
印刷所　暁印刷株式会社　製本所　株式会社鈴木製本所
Printed in Japan 1958 ©

ラング世界童話全集 8

あかいろの童話集

もくじ

半ぺらひよこ（スペイン）……6
プルーイネックの石（フランス）……16
霜の王さま（ロシア）……29
ふしぎな　ぼだいじゅ……37
三つのおしえ（アルメニア）……50
ホック・リーと小人たち（中　国）……67
小さな　みどりいろのかえる（フランス）……77

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

魔法の本（デンマーク）……95
目に見えない王子……111
ほんとうの鳥（スペイン）……131
ガラスのおの……152
小さな兵隊さん（ドイツ）……164
青い鳥（フランス）……198

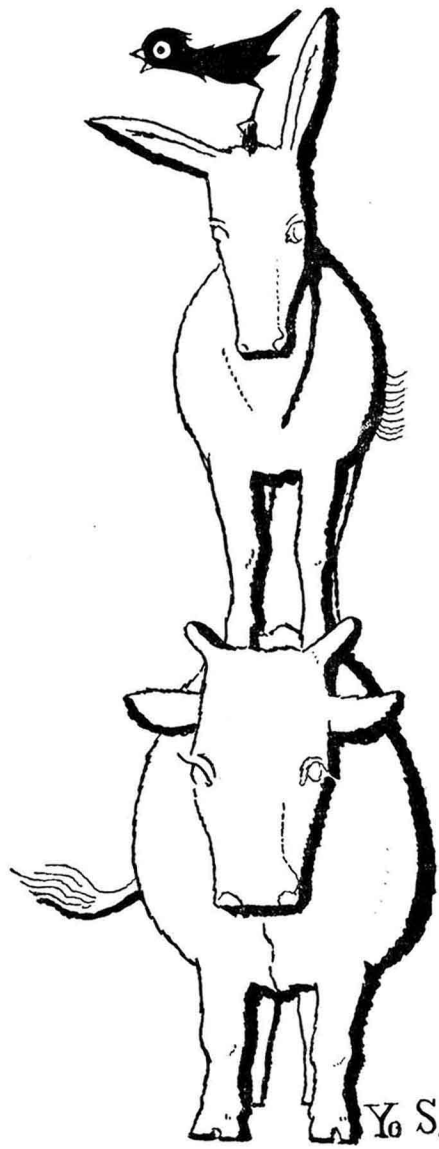
そうてい　大橋正

くちえ

さしえ

菅野陽

あかいろ
の
童話集



半ぺらひよこ

むかしむかし、スペインに、一わの黒くてうつくしいめんどりがいました。めんどりにはたくさんのひよこがありました。みんなまるまるとふとった、りっぱなひよこたちでしたが、そのなかで、いちばん下の弟だけが、にいさんやねえさんたちと、すこしもにていないのでした。

ほんとうに、おかしなかっこうのひよこでした。からをやぶって出てきたとき、おかあさんは、こんなことってあるかしらと思いました。つばさの下にかかえているきょうだいたち十二わの、ふわふわしたわた毛のはえた、やわらかなひよこたちと、すっかりちがうのです。ふつうのひよこを、まんなかからちょんぎった、その片一方みたいだったのです。足が一本しかなく、つばさも一つなら、目も一つ、頭やくちばしも半分ずつしかありませんでした。おかあさんは、そのすがたを見るたびに、かなしそうに頭をふっていいました。

「わたしのいちばん下の子は、なさけない半ぺらひよこなんだ。この子は、にいさんたちみたいに、

背の高い、りっぱなおんどりには、けっしてなれないだろう。にいさんたちは、世の中に出たら、つれていかれた鳥小屋で、ほかのにわとりたちを家来にしてしまうにちがいない。だけど、かわいそうなこの子だけは、ずうっとうちで、わたしといっしょにくらさなくてはならないだろう。」

そして、おかあさんは、その子をメディオ・ポリトとよびました。それは、スペイン語で、半ぺらひよことういみです。

ところで、まもなく、おかあさんは、メディオ・ポリトが、そんなちんばで、どうしようもないすがたをしているくせに、いつまでも、おかあさんのつばさの下にかばってもらおうなどとは、これっぽっちも思ってないのを知りました。ほんとうに、この子は、にいさんや、ねえさんたちと、かっこうもにていなければ、性質もにていませんでした。みんなは、よくいうことをきく、いい子たちで、おかあさんがよんだときでも、ぴよぴよいいながら、そばへかけもどってきます。ところが、メディオ・ポリトは、片足のくせに、どこへでも、ふらふらと出かけていってしまうくせをもっていたのです。そして、おかあさんが鳥小屋へよびもどそうとすると、耳が片方しかないのをいいことにして、きこえないふりをするのでした。

ある日、おかあさんが、うちじゅうをつれて、野原へさんぽに出たとき、メディオ・ポリトは、ひょこひょこかってにはなれていって、とうもろこしの畑のなかにかくれてしまいました。にいさんやねえさんたちは、ひどく心配して、ながいあいださがしまわりました。おかあさんはおかあさんで、

心配のあまり、大あわてにあわてて、こっこっと鳴きながら、あちらこちら、かけまわりました。

大きくなるにつれ、メディオ・ポリトは、ますますいうことをきかない、わがままものになっていきました。おかあさんにも、ちょいちょいらんぼうをするし、ほかのひよこたちとも、はらをたててよくけんかをしたものです。

ある日、メディオ・ポリトは、いつもよりながいあいだ、野原をわがもの顔にあるきまわっていました。かえってくると、ちょんちょんとびあがっては、地面をけるかわったあるきかたで、おかあさんのところへとんでいき、なまいきな目つきで、じろりと片目をむけていいました。

「おかあさん、こんな百姓家の庭のたいくつなくらしには、ぼくはもうあきあきしたよ。見えるものといったら、さびしそうなとうもろこしの畑だけじゃないか。王さまにあいに、マドリッドへ出かけるよ。」

おかあさんは、さけびました。

「マドリッドへだって。まあ、この子ったら。なんてばかなんだろうね、おまえは。マドリッドへいくのには、おとなのおんどりにだってたいへんな、ながい旅をしなくてはならないんだよ。おまえみたいな小さな子じゃ、半分もいかないうちに、へとへとになってしまうだろうさ。いけない、いけない。うちで、おかあさんとおとなしくしていなさい。いまに大きくなったら、いっしょにそのへんまで出かけようね。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

けれども、メディオ・ポリトは、もう決心してしまったのです。おかあさんのいいつけなど、きこうとしませんでしたし、にいさんやねえさんたちが、いろいろとたのんだり、ひきとめたりしても、まるであいてにしませんでした。

メディオ・ポリトはいいました。

「こんな息のつまりそうな、せまくるしいところに、みんなでぎゅうぎゅうづめになっていたって、なにになるんだい。王さまのお城のりっぱな庭が、ぼくひとりのものになったら、たぶん、みんなのうちのだれかを、ひとりぐらいはよんでやるよ。」

そして、さようならというひまもまてないように、あぶなっかしい足どりで、マドリッドへいく道のほうへいってしまいました。

「いいかい、人にあったら、だれにでもきっと、しんせつに、礼儀ただしくするんだよ。」

おかあさんは、あとをおいかけていって、大声でいいました。でも、メディオ・ポリトは、すこしでもはやく、いってしまおうとしていたので、たちどまってへんじもせず、ふりかえりもしませんでした。

すこしいって、近道をしようと、野原をつっきりながら、メディオ・ポリトは、小川のところを通りました。ちょうど、小川は、雑草や水草がおいしげって、いっぱいになってしまい、水のながれがせきとめられていました。

半ぺらひよこが、ぴょんぴょんとそのつつみをとんでいくと、小川はさけびました。
「ああ、メディオ・ポリトさん。どうかここへきて、この草をどけて、わたしをたすけてください。」
「たすけてくれだと、ふん、こいつはおどろいた。」
頭をあげて、しっぽのはねを二三本ふるわせながら、メディオ・ポリトはいいました。
「そんなつまらないことで、ひまつぶしをするとでも思うのかい。自分でなんとかするんだな。いそがしい旅人にやっかいをかけるのは、よしてもらおう。ぼくは、王さまにあいに、マドリッドへいくんだからな。」
そういって、メディオ・ポリトは、ひょっこすっこ、ひょっこすっこ、いってしまいました。
すこしいくと、森のなかで、ジプシーたちが、けすのをわすれた、たき火のところへ出ました。もえつきたところで、もうじききえてしまいそうでした。
半ぺらひよこが近づくと、たき火は、よわよわしく、ふるえる声でいいました。
「ああ、メディオ・ポリトさん。ぼうきれか、かわいた葉でものせてくれないと、ぼくはもうじき、すっかりきえてしまいそうです。どうか、おたすけください。さもないと、ぼくは死んでしまいますよ。」
「たすけてくれだと。ふん、こいつはおどろいた。ぼくはほかに、いろいろすることがあるんだ。ぼうきれなら、自分であつめたらいいだろう。ぼくにめんどうをかけないでほしいね。ぼくは王さまに

あいに、マドリッドへいくんだからな。」

そういって、メディオ・ポリトは、ひょっこすっこ、ひょっこすっこ、いってしまいました。

つぎの朝、マドリッドも近くなったとき、風もえだにひっかかって通りぬけられないほどの大きなくりの木のまえにやってきました。

風がよびかけました。

「ああ、メディオ・ポリトさん。どうか、ここへとびあがって、このえだからぼくをはずしてください。はなれることができなくて、とってもくるしいんです。」

「そんなところへいくなんて、自分がわるいんじゃないか。」

と、メディオ・ポリトはこたえました。

「ぼくは、おまえをたすけるために、こんなところにたちどまって、朝っぱらからひまつぶしはできないんだ。自分ですりぬけることにして、ぼくのじゃまはしないでくれ。ぼくは、王さまにあいにマドリッドへいくんだからな。」

そういって、メディオ・ポリトは、げんきいっぱい、ひょっこすっこ、ひょっこすっこ、いってしまいました。もう、マドリッドの町の塔や、屋根が見えていたのでした。

町へはいると、門のまえに兵隊たちが立っている、大きなすばらしい家が見えました。これがきっと、お城なのだと、メディオ・ポリトは、すぐに気がつきました。そして、おもて門のところまでい

って、王さまが出てくるまで、そこでまつことにしました。ところが、うらのほうのまどのまえを、ぴょんぴょんと通っているのを、王さまのコックにみつかってしまいました。

「ちょうどおあつらえむきのがいたぞ。」

と、コックはさけびました。

「王さまが、夕食にひなどりのスープをどうしてもほしいと、おいいつけになったところなんだ。」

そういって、コックは、まどをあけると、にゅっと、うでをのばして、メディオ・ポリトをつかまえ、火のそばにおいてあったスープなべのなかへ、ほうりこんでしまいました。ざあっとつめたい水を頭からかけられたとき、どんなにつめたくて、ぞっとしたことでしょう。つばさはぐっしょりぬれて、わきばらにくっついてしまいました。

メディオ・ポリトは、目のまえがまっくらになって、さけびました。

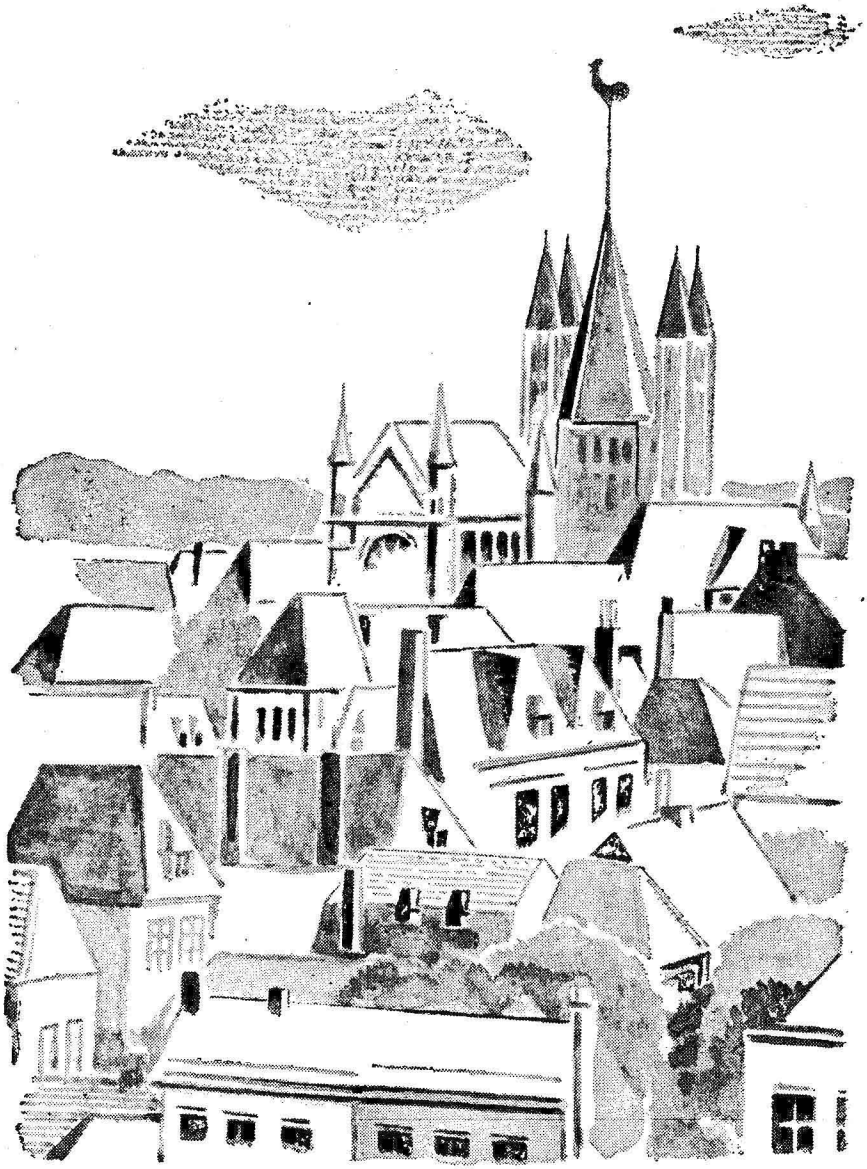
「水さん、水さん。どうか、たのむから、そんなにぼくをぬらさないでおくれよ。」

それにこたえて、水はいいました。

「やい、メディオ・ポリト。おまえは、わたしがむこうの野原の小川だったとき、どうしてもたすけてくれなかったじゃないか。だから、こんどは、おまえがばつをうけるばんだ。」

それから、火がもえだして、メディオ・ポリトは、あつさからのがれようと、なべのなかを、はしからはしへ、とんだりはねたり、たいへんくるしみました。

「火さん、火さん。そんなにぼくをこがさないでおくれ。大やけどをするのがわからないのか。」
それにこたえて、火はいいました。
「やい、メディオ・ポリト。おまえは、わたしがむこうの森できえそうになっていたとき、どうしても、たすけてくれなかったじゃないか。これからおまえに、ばつをあたえてやるんだ。」
あまりくるしいので、もうだめだと思ったとき、ようやくコックがふたをもちあげて、王さまの夕食のスープができたかどうか、見ようとしました。
コックは、あきれて、大声でいいました。
「なんだい、これは。このひよこは、ぜんぜんつかいものにならないぞ。まっくろこげになってるじゃないか。これじゃ、王さまのテーブルにだすわけにはいかないや。」
そういって、コックは、まどから、メディオ・ポリトを通りへほうりだしました。すると、風が、つかまえました。風は、さあっと空にまいあげたので、メディオ・ポリトは、まるで息もできず、心臓がわきばらにぶつかって、いまにもこわれるのではないかと思ったほどです。
メディオ・ポリトは、息をつまらせていいました。
「ああ、風さん。そんなにいそいで吹きまくると、ぼくは死んでしまうよ。どうか、ちょっとやすませておくれよ。」
けれども、あんまり息がきれて、おしまいまでいうことができませんでした。



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com